

九州地域の大豆をめぐる事情



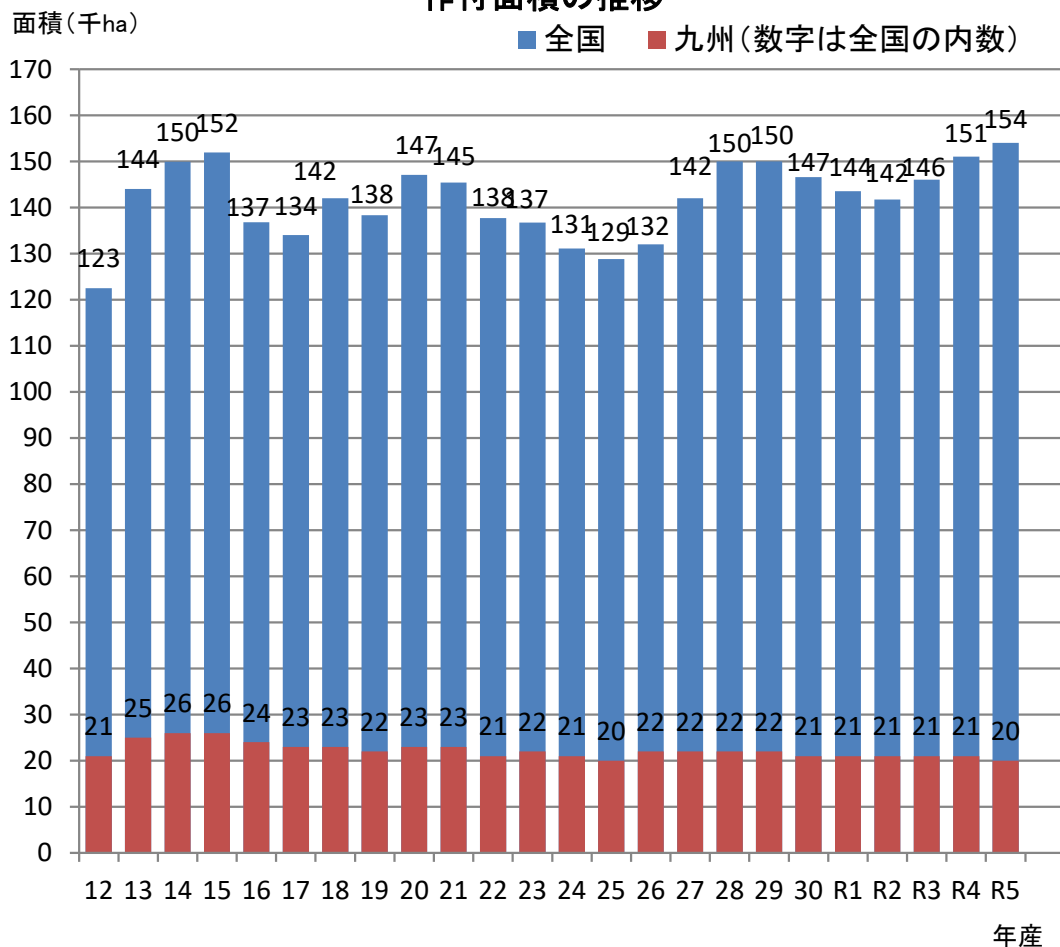
令和7年3月
九州農政局生産部

表紙写真: そらみのり
写真提供: 農研機構

1 作付面積

- 九州地域の作付面積は20,000ha前後で安定しており、令和5年産の全国の作付面積は154,700ha、九州地域は20,700haで占める割合は約13%となっている。
- 県別では福岡県が8,090haで最も多く、次いで佐賀県が7,360ha。この両県で九州地域の作付面積の約75%を占め、全国では北海道、宮城県、秋田県に次ぐ面積となっている。

作付面積の推移



九州各県における作付面積の推移

(単位:ha)

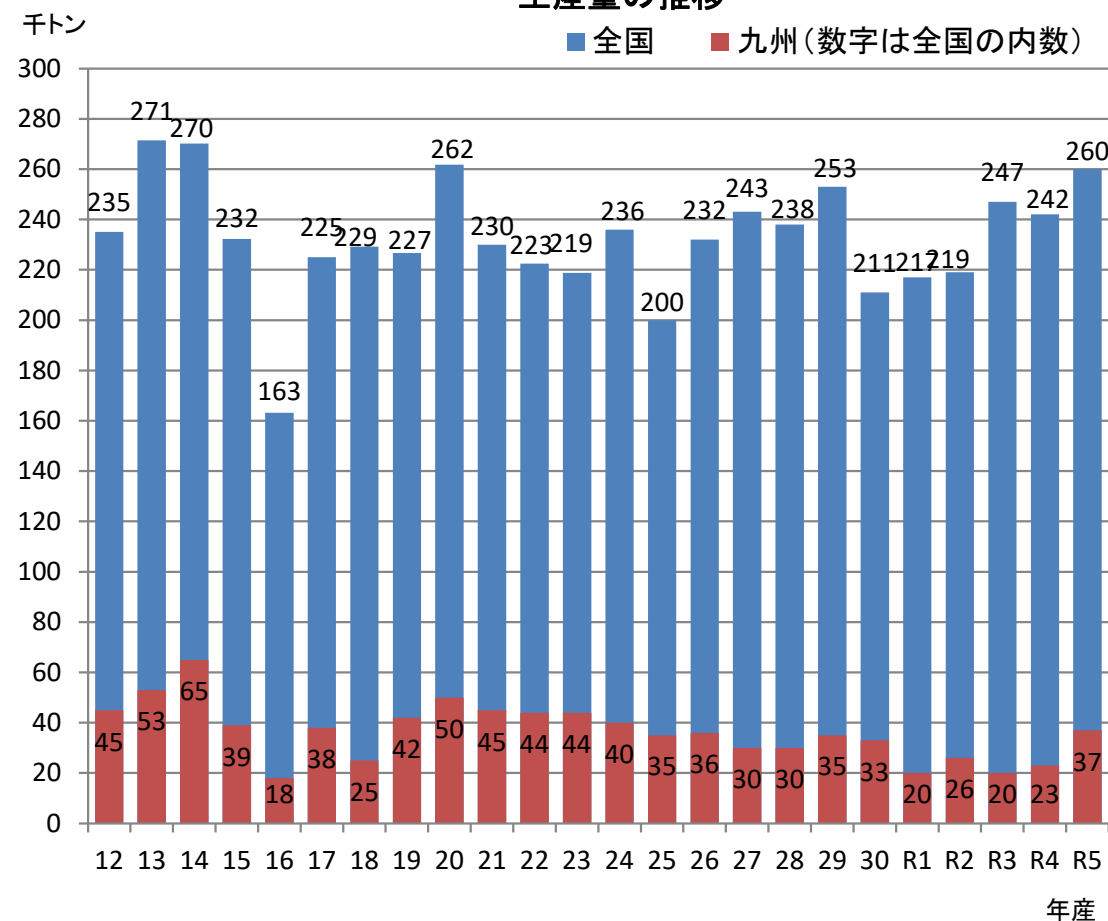
	29年産	30年産	令和元年産	2年産	3年産	4年産	5年産
全国	150,200	146,600	143,500	141,700	146,200	151,600	154,700
九州	21,700	21,400	21,000	20,800	19,600	21,000	20,700
	14%	15%	15%	15%	13%	14%	13%
福岡	8,410	8,280	8,250	8,220	8,190	8,160	8,090
佐賀	8,150	8,000	7,820	7,750	7,850	7,630	7,360
長崎	449	468	399	409	400	376	348
熊本	2,440	2,430	2,450	2,420	2,500	2,660	2,730
大分	1,700	1,630	1,540	1,410	1,440	1,560	1,520
宮崎	233	250	219	223	218	244	228
鹿児島	328	364	325	346	345	386	389

2 生産量

- 全国的な生産量は、北海道及び九州において生育期間がおおむね天候に恵まれ、着莢数が多かったため前年比7%増の260,800tとなった。
- 九州産の生産量は減少傾向にあり、特に、播種期や収穫期の降雨による適期作業の逸失、台風による冠水・倒伏等による生育不良、開花期以降の乾燥害が主な要因となっている。特に適期播種は、その後の生育等に大きな影響を及ぼすことから、播種時期が梅雨と重なる九州地域においては、排水対策の徹底と、その後の乾燥害という相反する対策が重要となっている。
- 県別では、佐賀県が15,500tと最も多く、次いで福岡県の15,000tで、この両県で九州地区の生産量の約81%を占める。

生産量の推移

■ 全国 ■ 九州(数字は全国の内数)



九州各県における大豆生産量の推移

(単位:t)

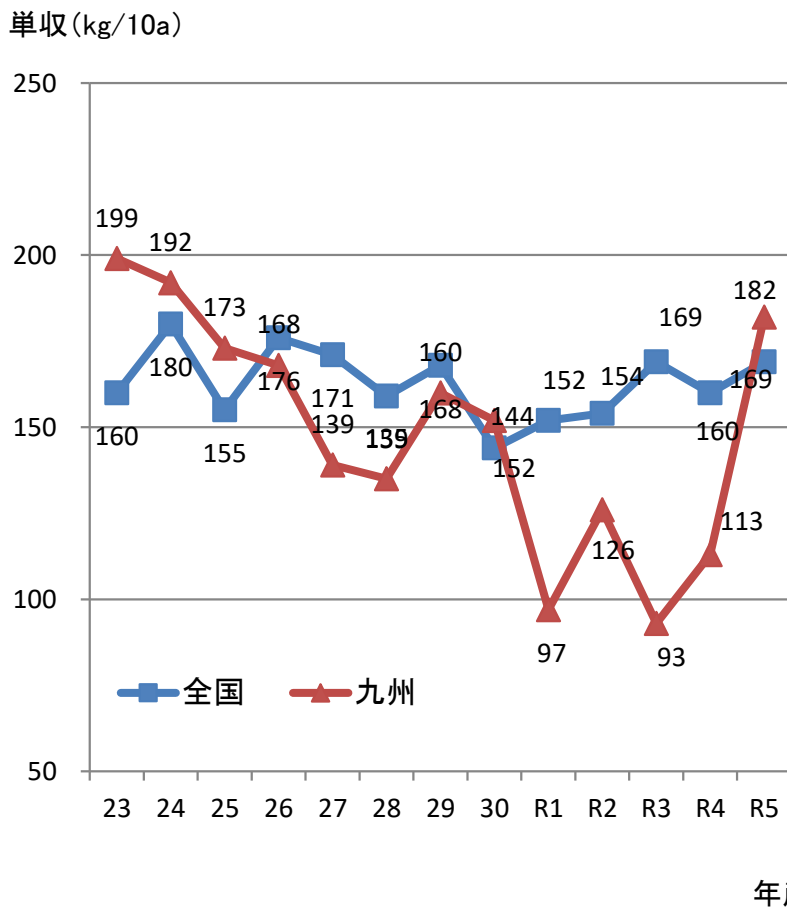
	29年産	30年産	令和 元年産	2年産	3年産	4年産	5年産
全国	253,000	211,300	217,800	218,900	246,500	242,800	260,800
九州	34,700 (14)	32,600 (15)	20,400 (10)	26,200 (12)	19,600 (8)	23,700 (10)	37,700 (10)
福岡	13,500	12,900	8,830	10,300	7,210	9,790	15,000
佐賀	15,100	13,600	6,260	10,100	7,540	8,930	15,500
長崎	525	421	207	151	164	226	428
熊本	3,440	3,620	3,090	3,750	2,730	2,950	4,530
大分	1,580	1,420	1,260	1,330	1,380	1,310	1,570
宮崎	261	273	344	279	251	76	178
鹿児島	325	389	406	260	342	374	502

資料:いずれも作物統計

3 単収

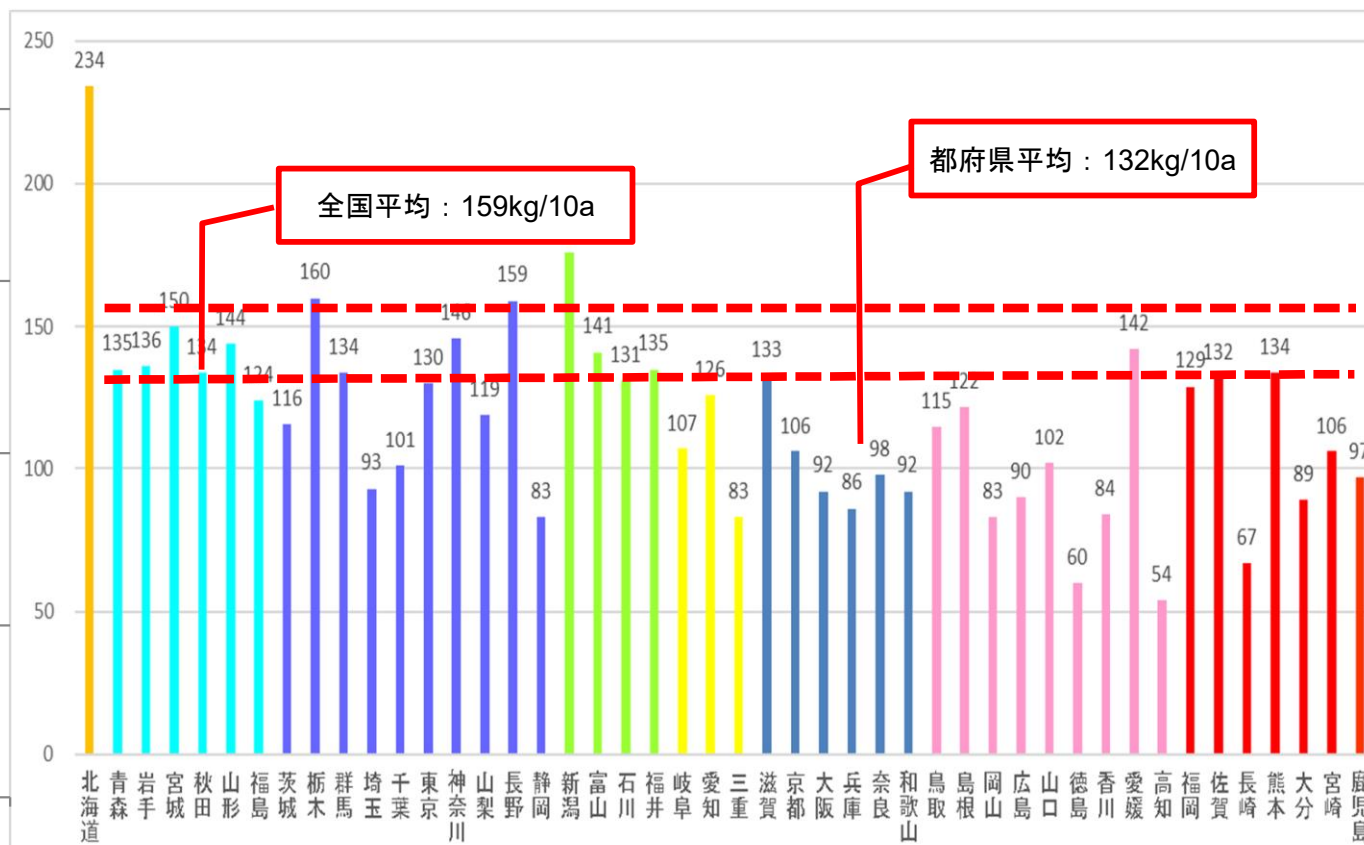
- 令和5年産の全国の単収は169kg/10aであり、近年は160kg前後/10aで推移。
- 令和5年産の九州地域の単収は182kg/10aであり、5年ぶりに全国平均169kg/10aを上回った。
- 全国的に単収は伸び悩んでおり、特に九州地域では近年天候不良により単収が大幅に低下していたが11年ぶりに180kg/10aを超えることができた。

10a当たり収穫量の推移



単収 (kg/10a)

都道府県別平均収量(令和5年産)



※平均収量: 直近7カ年の単収のうち、最高及び最低を除いた5カ年の平均値

4 品種

- 九州地域における品種別検査数量は、5年産で「フクユタカ」が24,139トンと最も多く、九州地域全品種の約70%を占める。
- フクユタカは、高タンパクで豆腐に加工する際の収率が高く、豆腐・油揚げ用原料として高い評価を受けており、広域適応性があり、日本で最も多く栽培されている大変優れた品種であるが、昭和55年に開発されており大変古い品種である。
- 九州ではフクユタカから他品種への切替期に入っており、福岡県及び大分県が令和7年中にちくしB5号への完全切替を予定しているほか、熊本県はフクユタカA1号、佐賀県でも次期奨励品種決定試験の結果により品種を切り替える予定である。

品種別検査数量(令和5年産)

品種名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	九州計
フクユタカ	5,296	13,256	377	3,694	1,091	97	328	24,139
ちくしB5号	7,376							7,376
佐大H01号		352						352
すずおとめ				38	103			141
キヨミドリ	7					8		15
その他(種子用等)	1,083	537	19	663	220	22	110	2,654
合計	13,762	14,145	396	4,395	1,414	127	438	34,677

単位:トン

※「フクユタカ」の小粒は「その他(種子用等)」に計上。

資料:農産物検査成績(生産年翌年3月末日現在の検査成績)

九州地域に適した新品种

- 《そらみのり》 難裂莢性を有し、フクユタカより3割程度多収、葉焼病抵抗性を持ち、白目で外観品質に優れる。
- 《ちくしB5号》 福岡県にて育成された品種。対倒伏性に優れ白目で外観品質も優れる。タンパク質含有率はフクユタカと同等かやや低い。
- 《フクユタカA1》 フクユタカに難裂莢性を導入した品種。外観、タンパク質含有量及び栽培特性ともにフクユタカと同等。

品種切替のメリット・デメリット

【メリット】

- 極多収品種では、フクユタカより3割以上の多収が見込める。
- 病気に耐性のある品種や、裂莢しづらい品種が開発されており、作業量の低減や収穫ロスを減らすことが可能。

【デメリット】

- タンパク質含有量等の品質が変化することにより、豆腐等の製造業者が製造方法を調整する手間がかかる。

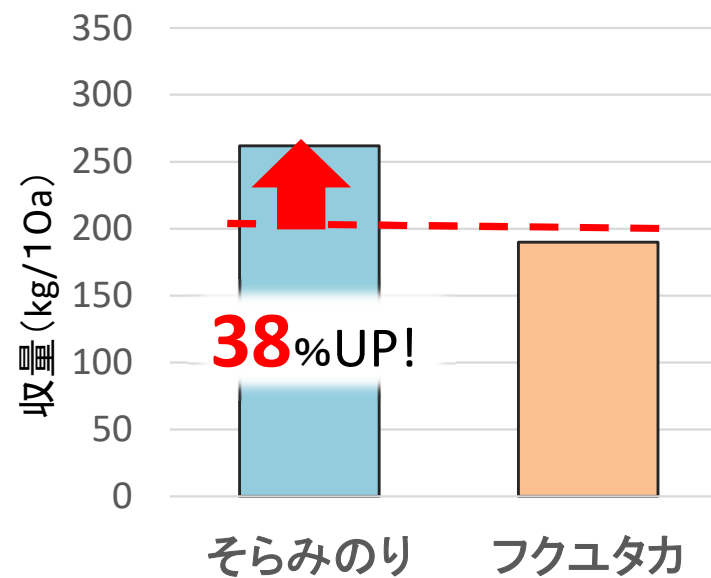
4-1 九州地域で普及が期待される新品種紹介

そらみのり

・農研機構九州沖縄農業研究センターが開発した新品種。収量が高い米国品種(Santee)と、育成系統(九州148号)を交配し、多収で豆腐に利用できる新品種として育成した。

そらみのりの主な特性

- 1) **難裂莢性**で「フクユタカ」よりも**3割以上多収**
- 2) **葉焼病抵抗性を有する**
- 3) 「フクユタカ」よりも1週間程度晩生
- 4) 主茎長が長いが、対倒伏性は「フクユタカ」と同等
- 5) ヘその色が“黄”で外観品質に優れる
- 6) 百粒重は、「フクユタカ」と同等かやや小さい
- 7) タンパク質含有率は「フクユタカ」と同等かやや低い



※収量は三重県、兵庫県、熊本県における5試験の平均

【用語解説】

・裂莢性(れっきようせい)

成熟した莢がはじける性質を指します。裂莢性が“易”の品種は、成熟後に高温乾燥状態が続くと、自然にはじけやすく、莢内の種子がこぼれてしまうので、収穫ロスの原因になります。

・葉焼病(はやけびょう)

細菌によって引き起こされる病害で、ダイズの葉に感染すると斑点性の病斑が現れ、症状が激しくなると葉が早期に落ち、粒大や収量が減少するなどの影響が出ます。

・ヘそ

種子が莢とつながる部分。黄、緑、淡褐、暗褐、黒などに分類される。

・タンパク質含有率

タンパク質含有率が高いほど、豆腐にした時に豆腐が壊れるまでに要した力の強さ(豆腐の破断強度)が高くなる傾向があります。

4-2 九州地域で普及が期待される新品種紹介

フクユタカとそらみのりの外観比較



フクユタカ



そらみのり

◇ヘその色が「フクユタカ」の淡褐と異なり、黄で外観が良好。

◇納豆に加工する場合、ヘその色が黄の品種が好まれるため、活用が期待される。

◇豆腐加工適性試験の結果から、「そらみのり」は豆腐に利用できると評価された。

フクユタカとそらみのりの草本比較



フクユタカ

そらみのり

- 「そらみのり」は「フクユタカ」よりも植物体が大きく、莢数が多い。
- やや倒伏に弱い、根元からの倒伏が少ないのが特徴。
- 最下着莢節位高が「フクユタカ」に比べて高いため、コンバインでの収穫も容易。
- 青立ちの発生が少ない。

【用語解説】

・最下着莢節位高(さいかちやつきょうせついかう)
子葉節(一番下の節)～最下位の莢が着生した節までの高さのこと。最下着莢節位が低すぎると、コンバインでの刈り取り位置を低くするため、コンバイン内に土が混入しやすくなります。コンバインに取り込まれた土は、子実の汚粒の発生原因になります。

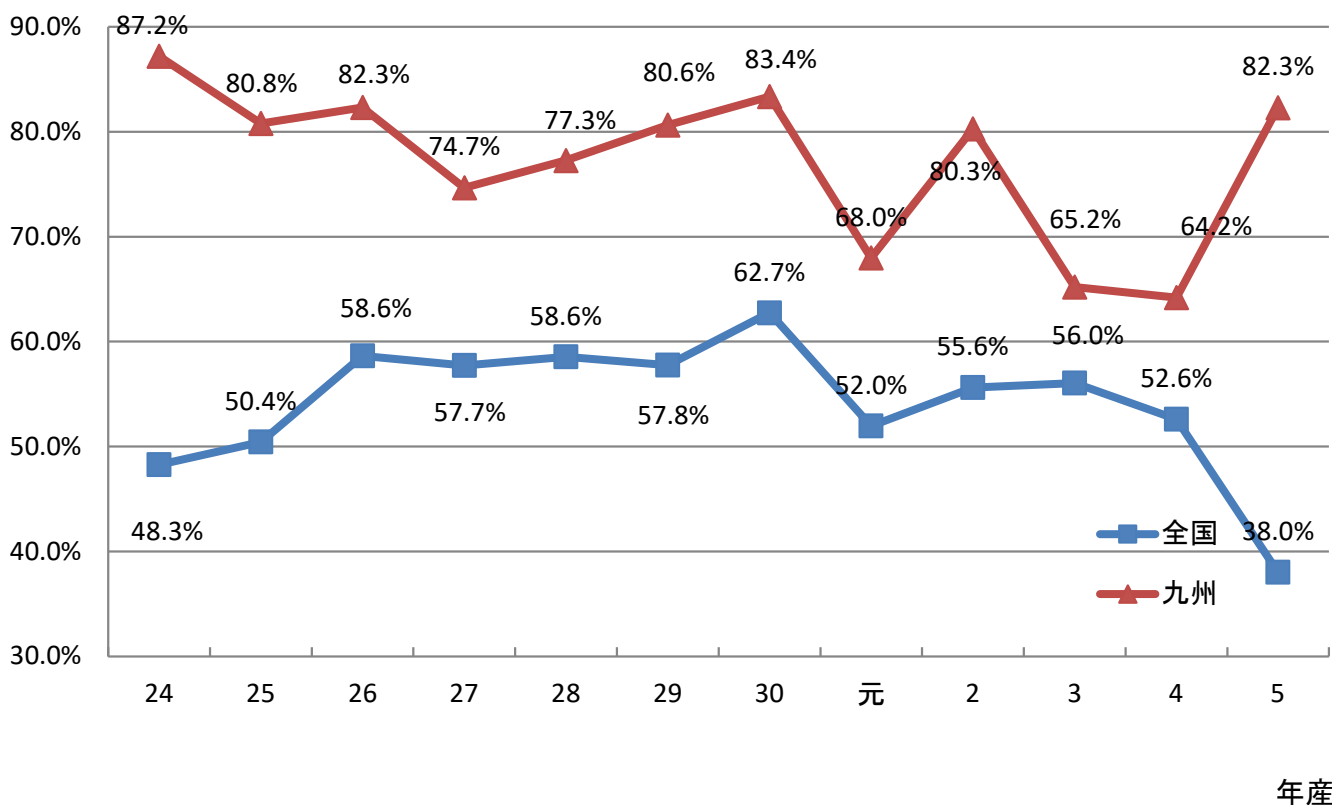
・青立ち

莢は茶色く成熟に達し、収穫適期を迎えているものの、茎葉が枯れずに青々としている状態のこと。莢先熟や成熟不整合などと呼ばれることもあります。青立ちが発生すると、子実の汚損の原因となり、検査等級の低下につながります。

5 検査等級

- 農産物検査の等級割合を見ると、九州産の上位等級(1等及び2等)比率は、ほぼ毎年全国平均値を上回り、実需者から高い評価を得ている。
- 検査における格下げの要因は、粒の充実不足による形質不良、汚損粒、しわ粒、カメムシによる吸害となっている。

○ 普通大豆の農産物検査における上位等級の割合



資料: 農産物検査成績(生産年翌年4月末日現在の検査成績)

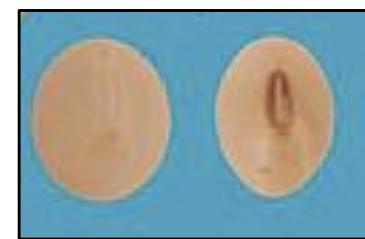
参考 大豆の品位

(最高限度(%))			
	項目 等級	水分	被害粒等
	1 等	15	15
普通大豆	2 等		20
	3 等		30
特定加工用大豆			35

注) 特定加工用大豆は、豆腐・油揚げ・しょうゆ、きなこ等、大豆の原形をとどめない製品に使用する大豆に適用される規格です。



しわ粒



整粒
(健全粒)

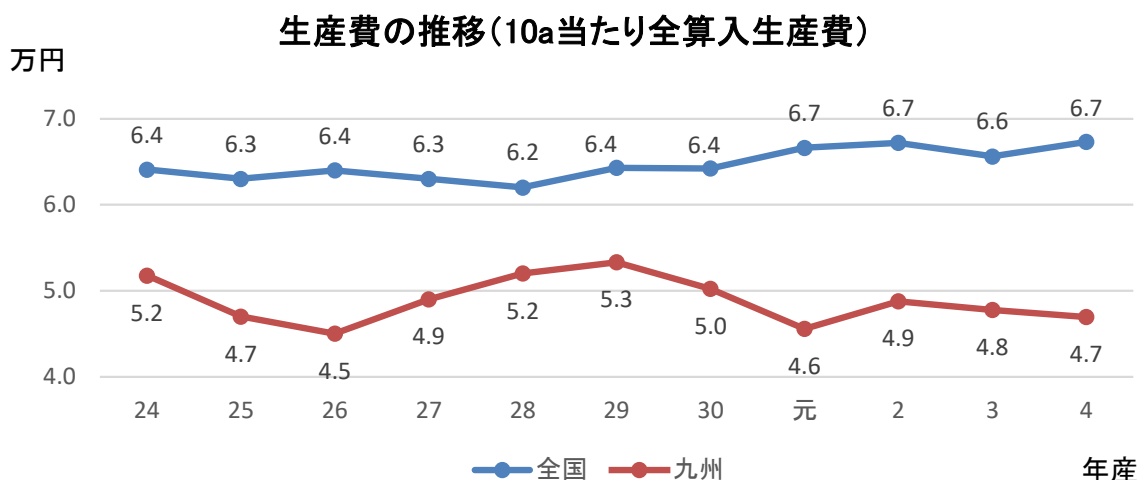
未熟粒
(扁平粒)



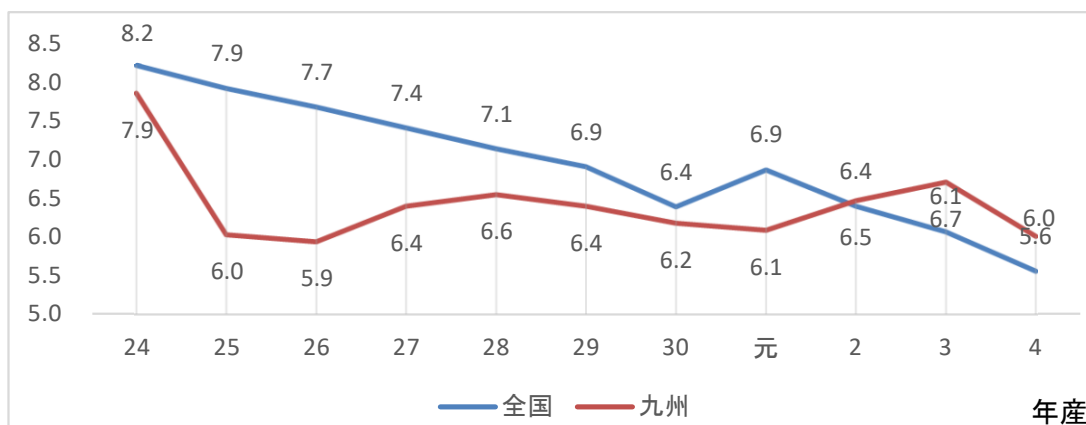
吸害粒

6 生産費と労働時間

- 10a当たりの生産費(令和4年産)は、全国では6.7万円/10a、九州地域では4.7万円/10a。九州地域は全国と比較して、毎年度1万円以上下回っている。
- 九州地域の主要項目の費用は、全国と比べ、農機具費と肥料費が圧倒的に低い。これは、大型機械の共同利用、共同乾燥施設への委託や、九州では大豆への施肥が一般的ではないことが大きいと考えられる。
- 労働時間については、以前は全国と比べて九州地域は短かったが、令和2年産から九州地域が長くなっている。

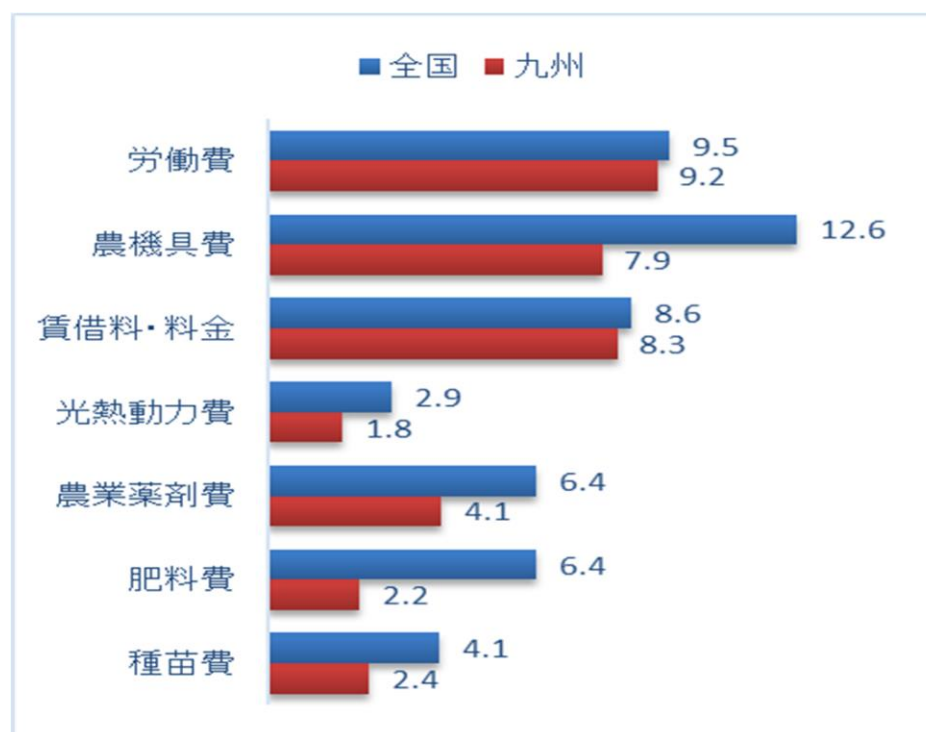


○ 大豆の労働時間の推移



生産費の内訳(単位:千円/10a)

(主要項目)



資料: いずれも生産費統計(令和4年産)

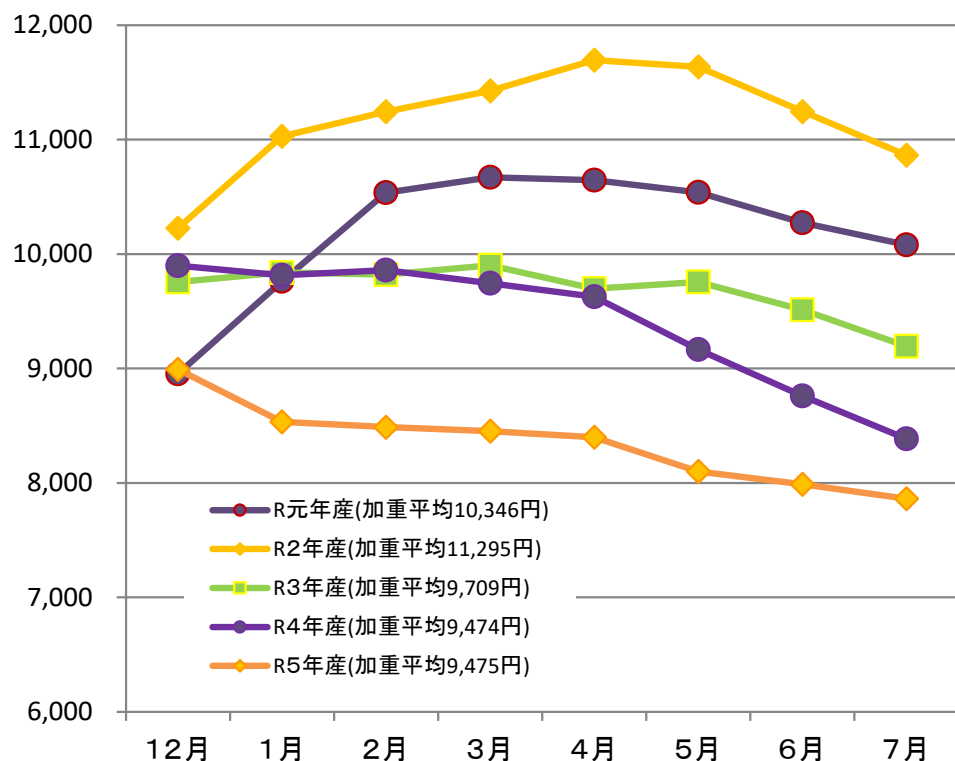
注: 平成19年産の調査結果より、小規模農家の集落営農組織への参加等による生産構造の変化を反映したものであることから、利用に当たっては注意が必要。

7 国産価格の動向

○ 国産価格は、気象条件による豊凶変動により生産年ごとの価格変動が大きい。平成30年産以降では、生産量の減少に伴い、9,000円/60kgを超える平均入札価格で推移しており、西日本を中心に天候不良となった令和元年産及び2年産では、10,000円/60kgを超える高値となっている。

○ 令和元年産及び令和2年産は天候不順等による大幅な減収となり、九州産は高値で推移。特に上場数量が平年の約3%となった令和元年産の「福岡県産フクユタカ」では、24,260円/60kgの平均落札価格となった。

○ 国産の入札取引における落札価格の動向



資料: 日本特産農産物協会入札結果

○ 主要銘柄(普通大豆)の入札販売結果の推移(単位: 円)

県	品種	元年産	2年産	3年産	4年産	5年産
全国	普通大豆平均	10,461	11,491	9,864	9,638	8,645
北海道	大粒 とよまさり	10,370	11,185	10,809	9,936	8,742
青森	大粒 おおすず	9,946	11,952	9,009	—	8,997
秋田	大粒 リュウホウ	9,836	12,389	9,068	8,956	—
栃木	大粒 里のほほえみ	10,407	11,784	9,338	8,941	8,686
新潟	大粒 里のほほえみ	10,161	11,844	9,565	9,165	9,063
愛知	大粒 フクユタカ	14,412	12,023	11,946	11,941	7,744
滋賀	大粒 ことゆたか	11,143	12,123	9,630	9,182	8,555
福岡	大粒 フクユタカ	24,260	14,120	—	13,160	8,937
佐賀	大粒 フクユタカ	—	13,391	—	13,865	8,744
長崎	大粒 フクユタカ	—	—	—	—	—
熊本	大粒 フクユタカ	14,923	13,185	13,344	12,818	8,140
大分	大粒 フクユタカ	17,251	12,748	13,172	11,852	8,416
宮崎	大粒 フクユタカ	—	—	—	—	—
鹿児島	大粒 フクユタカ	—	—	—	—	—

資料: 日本特産農産物協会入札結果

注: 価格(円)は60kg当たりの包装代を含み、消費税等は含まない。

8 九州地域の「水田収益力強化ビジョン」(大豆部分 抜粋)

各県で策定された水田収益力強化ビジョンによると作付目標面積(令和8年度)は20,597.7haと、令和5年度の19,765.9haから53.1ha(4.2%)の増加となっており、国産大豆に対するニーズが高まるなか、産地一体となった生産の拡大が期待されます。

県名	水田収益力強化ビジョン(R5)			
	R5 作付面積	R8 作付面積 (目標年度)	増加率	取組方針
福岡県	8,050	8,600	6.8%	主食用米の転換作物として作付され、実需者ニーズも高いことから、本県水田農業における重要な品目である。産地交付金を活用して生産性の高い品種(ちくしB5号)への切り替えを行うことで、実需者への安定供給を図る。また、作付面積の拡大を図るとともに、適期作業や団地化、排水対策の徹底による湿害回避、土づくり等の取組により、収量の安定、向上を目指す。
佐賀県	7,280	7,400	1.6%	大豆は、実需者からの評価が高く生産拡大を求められており、また、主食用米以上の所得が期待できることから、本県の転作の基幹作物として、共同乾燥調製施設等の処理能力や、連作障害に留意しながら、引き続き推進を図る。 これまで取り組んできた適期播種や排水対策、雑草対策など基本技術の一層の徹底に加え、部分浅耕播種技術などの播種後の干ばつ、湿害にも対応した栽培技術の普及や、難防除雑草(ホオズギ、アサガオ等)の体系処理防除対策、集落営農法人等の組織の効率的な運営体制の構築に対して支援を行い、農家所得の確保を図る。 また、より効率的な生産体制を構築するためのブロックローテーションの広域化や地域の担い手への農地集積、高性能機械の導入・共同利用、稲わら・麦わらや堆肥等の有機物資源の有効活用による地力向上などを積極的に推進する。 さらに、販売面においては、実需者ニーズに対応した集出荷体制や販売体制の整備を進めながら、契約栽培を主とした需要の安定確保の取組を強化する。
長崎県	250.9	272.7	8.7%	播種の遅れ、排水不良等の課題により、H30 年産から4年連続で単収が 100 kg/10aを下回っている。産地交付金を活用し、300A 技術等の導入を推進するとともに、排水対策や雑草対策といった基本的な管理を徹底することで、作付拡大と生産性・品質の向上を図る。
熊本県	2,386	2,483	4.1%	認定農業者や地域営農組織などの担い手への農地集積を推進し、団地化やブロックローテーションによる生産性の向上と安定生産を推進する。
大分県	1,281	1,371	7.0%	栽培適地への作付を推進しつつ、排水性を向上させる地下灌漑システム(FOEAS)等の基盤整備事業の活用を推進する。その中で圃場の団地化、輪作体系の確立および圃場の地力向上、排水対策等基本技術の徹底により単収向上と品質の高位平準化を目指す。
宮崎県	204	234	14.7%	国内産の需要が高く、機械化体系が確立していることから、契約栽培等を中心とした安定生産を推進し、排水対策等の生産性向上の取組を推進する。 また主食用米や新規需要米、加工用米等と組み合わせた二毛作を推進する。
鹿児島県	314	237	-24.5%	適地適作を基本に、産地交付金を活用しながら、ブロックローテーションなど団地化を図るとともに、排水対策など生産性の向上を図る取組を推進し、実需者ニーズに対応した生産を推進する。
合計	19765.9	20597.7	4.2%	

参考 九州地域の主要産地の栽培ごよみ(佐賀県 佐城エリア)

令和 5 年産

大豆 栽培ごよみ

JAさが 佐城エリア

～安全・安心の売れる大豆をつくらう～

■重点事項

- 1) 適期播種のための作業計画の作成
- 2) すぐ播ける圃場に、大雨時でも対応可能な排水対策の実施
- 3) 適期播種が可能となる技術の導入
- 4) 育成期間中の干ばつ軽減対策の実施
- 5) 堆肥等の積極的な施用

収量品質の目標

項目	目標値	摘 要
種子更新率	100%更新	採種圃地種子への更新で品質特性の維持
仕上げ水分	12～13.5%	通風乾燥と水分の均一化
度	90%以上	調製と粒ぞろいの確保
上位等級率(1等～2等)	95%以上	品質の安定と被害粒除去
収量 (kg/10a)	300kg以上	適期作業と品質の安定
大粒率	60%以上	適期作業と品質の安定
タンパク質含有率(豆粕加工適性)	40%以上	土づくりと適期作業
異物の除去	異物混入0%	茎・葉・泥等の混入防止

■技術のポイント

1. 土作りと土壌改良

- ◎大豆は石灰の吸収量が多く、また石灰は根粒菌の繁殖にも役立つので、土壌診断に基づき石灰量を施用しPH6.0～6.5に矯正する。

2. 排水対策

- ◎麦収穫後、早めの弾丸暗渠・明渠等の施工による排水対策。

3. 種子の準備(種子は採種圃地の種子を利用する。)

- ◎種子消毒の徹底(土壌対策と紫斑病・発芽不良防止)
- ◎種子量は10a当り3～4kg(播種時期によって調整する)

4. 播種と発芽

- ◎適期播種は7月上旬中旬を心がける。
- ◎発芽苗立ちを確保する。
- ◎耕起後は土壌水分があるうちに播種する。
- ◎幹土は小さくし、湿害防止対策として敷立てを行う。

5. 培土

- ◎培土は1～2回実施し不定根・根粒菌の確保と倒伏や雑草を抑える。

培土の回数	実施時期	培土の程度	播種後の目安
第1回目	本葉2～3葉目	子葉が隠れる程度	播種14～18日
第2回目	本葉4～5葉目	初生葉が隠れる程度	播種23～28日

6. 野菜と畝間灌水

- ◎開花直前頃に茎長が95cm以上(草丈が75cm以上)になる場合は、茎の頂点を切らないように注意しながら上部を剪定する(8月上旬頃)。
- ◎開花期～粒肥大初期に圃場が極度に乾燥した場合は、畝間に灌水する事により着実な確保や粒の肥大を図る。
- 但し、畝間灌水を実施する場合は、生育に影響を及ぼす可能性があるため、夕方入水し、朝方には落水しておくようにしましょう。

7. 病害虫防除(発生予測による適期防除)

病害虫	防 除 の 適 期	備 考
ハスモンヨトウ	第1回目は白変葉が散見され始める時期に防除。 その後は、発生を見て防除する。	発生予測により一斉防除を行うと効果が高い。防除時期が育伸長期～粒肥大中期になる場合はカムシや紫斑病に効果のある薬剤を混用して散布する。
カメムシ	育伸長期～粒肥大中期にかけて防除する。	多発生地域によっては、7～10日間隔で2～3回防除する。
紫斑病	育伸長期～粒肥大中期にかけて防除する。	成熟期前10日間の気温が15～24度、降雨が多い条件で発病多発する。収穫が遅れないようにする。

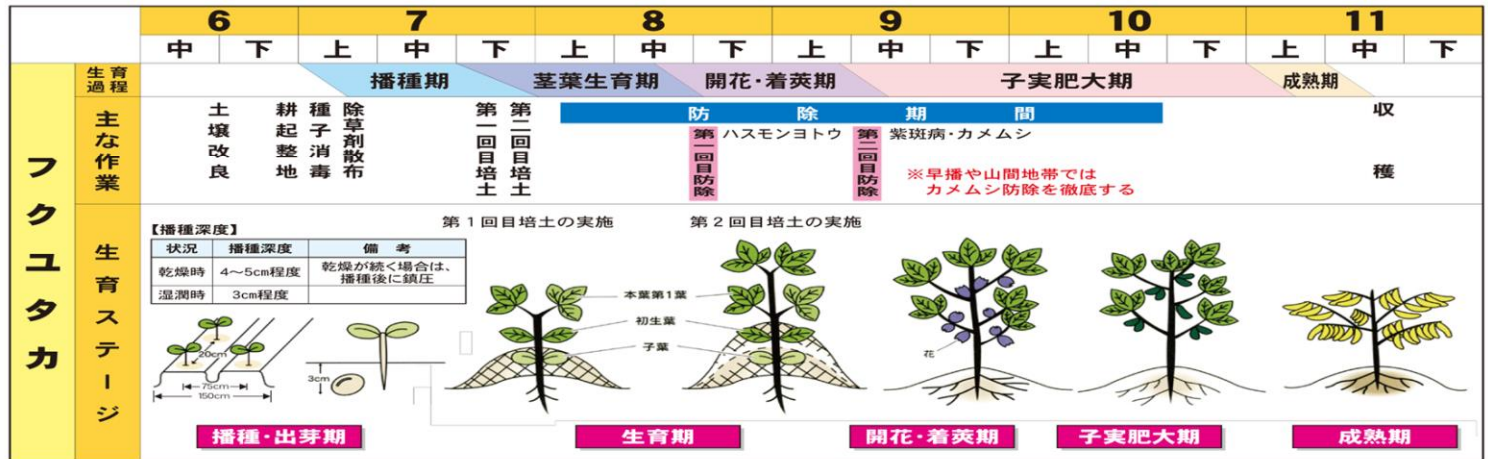
8. 収穫(水分16%以下での刈り取り・脱穀)

- ◎汚粒の発生防止。青大豆や雑草の混入による汚粒が発生しないように作業前には必ず取り除く。

表刈後、麦稈全量すき込みを必ず実施しましょう!

農薬散布時は、必ずマスクを着用しましょう!

異品種混入防止のため、周辺には黒大豆等を播種しないようにして下さい。



1. 品種特性

品種名	播種期	開花期	成熟期	茎長 (cm)	百粒重 (g)	収量 (kg)	へその色	適 要
フクユタカ	7月18日	8月30日	11月13日	52	27.8	328	褐色	豆腐加工適性が高い

2. 土作り資材

資 材 名	10a当り使用量	備 考
ミネラルG	100kg	持続性のある石灰成分とケイ酸、鉄分、バランスのとれたミネラルを含有。アルカリ成分(40%)
精粒苦土石灰1号	100kg～120kg	大豆は石灰の吸収量が多く、根粒菌の増殖にも役立つ。PH6.0～6.5を目標に計画的に石灰など土壌改良資材の施用を行います。
1～3生石灰(粒)	60kg～80kg	
マグサンエース	60kg～80kg	
ミネキング(鶏糞燃焼灰)	100kg～200kg	窒素成分は食んでいない。燐酸と加里とアルカリ性(37%)の有機肥料。

3. 播種期別の栽植様式

播 種 期	栽植本数 (m ² 当)	栽培様式 (条間×株間×1株本数)	播種量 (kg)
適期	7月 1日～ 5日	11本	75 × 25 × 2
	7月 6日～20日	13本	75 × 20 × 2
晩播	7月21日～25日	18本	75 × 15 × 2

- ※作業性や収量安定性を考慮し、適期に播種しましょう。
- ※晩播の場合は、栽植本数の確保に努める。
- ※晩播(窒素肥料を施用する)

4. 施肥基準

区 分	資 材 名	施肥量(kg/10a)	成分(kg/10a)
晩播(7月21日以降播種)	BB480	40kg	N P K
ヤセ地及び3年以上連作			5.6 3.2 4.0

5. 雑草防除

除 草 剤 名	10a当り使用量	希釈水量	使用上の注意
ブリグロックスL	600～1000ml	100～150ℓ	本田耕起前 展着剤加用
ラクサー乳剤	400～800ml	100ℓ	覆土は2～3cmとし、よく整地して播種直後に散布する。土壌が極端に乾燥している場合、効果が劣るので適度の水分を維持しているときに散布する。
ラクサー粒剤	4～8kg	—	
トレファノサイド粒剤2.5	4～6kg	—	
トレファノサイド乳剤	200～300ml	100ℓ	
エコトップP乳剤	400～600ml	100ℓ	播種後出芽前(雑草発生前)
ボルトフロアブル	200～300ml	100ℓ	一年生イネ科雑草(スズメノカタビラを除く)雑草生育期(イネ科雑草の3～10葉期)収穫前30日まで。
バスタ液剤	300～500ml	100～150ℓ	生育期の散布に当たっては、畦間処理を行い大豆にかけられないように注意する。(収穫28日前まで)

※アサガオ・ホオズキは手で抜き取り圃場外へ持ち出す。



6. 病害虫防除基準

薬 剤 名	対象病害虫	使用量	使用 方 法
種子消毒	キヒゲンセット	紫斑病・タネバエ	種子量10kgに100g
	キヒゲンR2フロアブル	紫斑病・タネバエ・苗立枯病	種子量10kgに200ml
本田防除	ノーモルト乳剤	ハスモンヨトウ	2000倍
	ベガサフロアブル	ハスモンヨトウ	2000～4000倍
	トレボン乳剤	ハスモンヨトウ・カメムシ・アブラムシ類	1000倍
	トレボンEW	ハスモンヨトウ	4000倍
	プレバソフロアブル	ハスモンヨトウ	1000～2000倍
	ファンタジスタフロアブル	紫斑病	1000～2000倍
	スタークル液剤	カメムシ	1000倍
	プレオフロアブル	ハスモンヨトウ・マメシキイガ・オオタバコガ	1000～2000倍

資料提供: 佐賀県農業協同組合

内閣総理大臣賞（農産・蚕糸部門）
農事組合法人 秋津宮農組合（熊本県熊本市）

経営の概要

- ◇S62年秋津CE建設に伴い、収穫受託組織・秋津宮農組合が設立。平成25年に地域の全農家参加型の農事組合法人・秋津宮農組合となった。
- ◇農家戸数 142戸
- ◇作付面積（令和5年度）
大豆84.6ha 水稻77.0ha 麦類133.2ha
- ◇大豆単収 218kg/10a
品 種 フクユタカ、すずおとめ
熊本県平均166kgの132%、熊本市平均の120.4%



受賞者の特色

- ◆秋津地区は、平成28年4月に発生した熊本地震の震源地から極めて近く、ほぼ全域で農地や農業用施設等に甚大な被害を受け、水稻作付けは不可と判断し、営農継続のため関係機関一体となり大豆へ全面切り替えしたほか、「秋津地区未来創造プロジェクト」を立ち上げ、県と市と連携し、営農への影響が最小限となるよう工事計画を組むとともに、大区画化等を含めた創造的復興を実施。
- ◆秋津宮農組合ではブロックローテーションによりほ場が完全に集約化されているため、排水路に仮設の堰を設けて水位を上昇させ、暗渠から水を逆流させて灌水(かんすい)を行うことで乾燥対策をしている。



農林水産省農産局長賞
江口 和広（佐賀県杵島郡白石町）

経営の概要

◇就農後は、米麦大豆とレタスを中心に作付けし、面積拡大を行ってきた。平成28年に長男が就農したことにより、農地を幹旋し別経営を行う。それを機に規模拡大についても大幅に行わず、単収向上・品質重視での栽培に切り換えた。

◇作付面積（令和5年度）

大豆6.0ha 水稻4.6ha 小麦9.8ha

◇大豆単収 280.6kg/10a

品 種 フクユタカ

佐賀県平均211kgの133%、白石町平均の131.1%



栽培・経営上の特徴

- ◆SAKUMOの情報田(JA依頼)として設置し干ばつ時(JAからLINEメールでアラート)には畦間灌水を行っている。
- ◆播種については地域の慣行栽培では150cmロータリー×2条播が大半を占めているが、独自に220cmロータリー×3条に切り替え、慣行より約40%(0.3時間/10a)程度労働時間を削減している。
- ◆「そらみのり」等の新品種、播種技術、早播、肥料等の実証試験について積極的に協力している。



日本豆類協会理事長賞
株式会社 河野農産(大分県国東市)

経営の概要

- ◇昭和52年に父親の洋一氏が水稲1ha、ほうれんそうで就農し、平成12年に洋一氏の息子の昭久氏が就農、令和5年に法人化するとともに昭久氏が法人代表となり現在に至る。
- ◇作付面積(令和5年度)
大豆25.1ha 水稲27.9ha 麦類57.6ha
- ◇大豆単収 260kg/10a
品 種 フクユタカ
大分県平均103kgの253%、国東市平均の173.3%



栽培・経営上の特徴

- ◆額縁明渠の施工はユンボを使用し、幅50cm、深さ40~60cmサイズに掘り下げ、しっかりとほ場外へと排水するように繋げることを徹底するとともに、ほ場中央部に管理機で畝に対し垂直方向に溝を掘ることで、水のたまりやすい部分も滞水しないように工夫している。
- ◆少人数で大面積の作業を行う必要があるため、各作業ごとに専用トラクターを所有している。そのため、作業ごとのアタッチメントの脱着時間の短縮している。



参考 第52回(R5年度)全国豆類経営改善共励会)九州地域優良事例

九州農政局長賞（大豆家族経営の部） 江頭 和彦（福岡県久留米市）

経営の概要及び栽培・経営上の特徴

- ◇ 経営面積 22.3ha（水稻・大豆・麦）
- ◇ 作付面積 大豆12.3ha（令和5年度）
- ◇ 大豆単収 274kg/10a
（福岡県平均185kgの148%）
- ◇ 品 種 フクユタカ

◆ 集落内の離農者からの依頼により農地を集積してきた結果、現状の面積まで規模が拡大。1ha/年程度のペースで拡大しており、今後も集落内の農地の受け皿として期待されている。

◆ 部分浅耕—工程播種の導入により土壌の過乾燥防止を図っている。

◆ 気象条件に併せて本暗渠栓を開閉するなどし、特に開花期以降の乾燥対策を行い、子実の充実向上を心掛けている。

◆ ドローンによる防除作業により作業の省力化を図っている。ドローン防除では乗用管理機と異なり降雨後のほ場内の過湿の影響を受けないため、適期防除にも繋がっている。

九州農政局長賞（大豆集団の部） 農事組合法人 中園営農組合（大分県国東市）

経営の概要及び栽培・経営上の特徴

- ◇ 経営面積 14.7ha（水稻・大豆・麦）
- ◇ 作付面積 大豆 5.6ha（令和4年度）
- ◇ 大豆単収 200kg/10a
（佐賀県平均117kgの171%）
- ◇ 品 種 フクユタカ

◆ 父親の代から水稻・大豆・麦を作付けしており、令和3年から経営移譲され、経営主として今後もさらなる農地集積を考えている。

◆ 令和4年産から中耕培土を行わない栽培法に切り替えており、表土を動かさないことで、アサガオ、ホオズキの発芽防止やコンバインでの収穫ロスの軽減を図っている。

◆ 基盤整備事業による本暗渠管の設置、額縁明渠及び弾丸暗渠の施工による湿害回避と、播種後と生育期の除草剤散布による雑草対策を徹底している。